

【書評】

N・ケンプ・スミス著（山本冬樹訳）

『カント『純粹理性批判』註解』上・下

（行路社、二〇〇一年）

長田 蔵人

本書は、Norman Kemp Smith, A *Commentary to Kant's "Critique of Pure Reason"* の翻訳である。この註釈書の初版が出版された一九一八年とは、同年に「マールブルク学派の集大成」（Maler 35ff.）であるE・カッシーラーが『カントの生涯と学説』を出版する一方、少し後の一九二四年にはN・ハルトマン、H・ハイムゼート、M・ヴントが相次いで論文、著書を発表し、「形而上学的」ないしは「存在論的」と呼ばれるカント解釈の

立場が形成されようとしていた、という時期である。またスミスの本国イギリスでは、功利主義に対する反動からカント、そして特にヘーゲルの哲学を復権させたT・H・グリーン、E・ケアード、F・H・ブラッドリー、B・ボーザンケットらの理想主義運動が大きな影響を残した直後だった。しかし、彼らのようにカントをヘーゲルへの途上段階とみなした理想主義運動にせよ、またドイツ観念論後に残された唯物論への反発から始まった新カント派にせよ、それらのカント解釈

がいずれも、自らの思想を展開するうえでの抛り所として耐えうるかどうかという観点からカントの思想を吟味したものであるのに対して、カントの死後およそ一〇〇年という時代は、カントをもう少し我が身から引き離し、歴史的な脈絡におけるその思想の意義を冷静に評価するということが、ようやく可能となった時期でもあった。つまり当時は、そもそもカントに確実に帰されるべき洞察は何であつたのかを正確に理解しようとする「批判的・歴史的探求」(Adickses V) が、その

最初の成果を提示し始めた段階でもある。英語圏における研究として初めてその成果を採り入れたスミスの註釈は、この後者の視点から展開されるものであり、そのことはまた、現在に至っても失われることのない基礎文献としての価値を本書に与える要因にもなった。ここではそのスミスの方法と、そこからの帰結であるカント理解の核心部分に焦点を当て、その特質を捉えた上で、出版から八〇年余りも経った現在に本書が翻訳されることの意味、という点について考えてみたい。

一

まず本書におけるスミスの基本的な研究姿勢の特色として、当然、指摘されねばならないのは、一九世紀終わりごろに集中した文献学的研究の成果を積極的に採り入れているという点である。H・フアイヒンガー (*Kommentar zur Kants Kritik*

der reinen Vernunft, 1881-82, Die transzendentale Deduktion der Kategorien, 1902)、B・エルトマン (*Reflexionen Kants zur kritischen Philosophie, 1882-84*)、E・アディケス (*Kants Systematik als systembildender Faktor, 1887, Kants handschriftlicher Nachlass, 1911-28*)、R・ライケ (*Loose Blätter aus Kants Nachlass, 1889-98*) などによって、『純粹理性批判』の成立状況を理解するための材料が揃えられ、またそれに基づいてこの著作の論述の性格について、ある一定の理解が形成された。つまり、『純粹理性批判』は、一七六九年から一七八〇年に至るあいだに書き溜められた原稿を、四、五ヶ月のうちに構想された全体的輪郭のうちに継ぎ合わせることによって完成されたものである、という理解である。もともとフアイヒンガーやアディケスに由来するこのような見解に対して、スミスも賛意を示し、矛盾を含み精確さに欠ける『純粹理性批判』の論述のなかでカントの思考の筋道を追うには、このよう

な前提に立つことが欠かせないという立場を採る。例えばスミスは第一版におけるカテゴリーの超越論的演繹の議論について、フアイヒンガーが示した執筆時期の四段階の区別を踏襲し、それらの各段階において述べられていることのあいだで辻褃を合わせるものが困難であること、しかしそのなかでも初期の未成熟な見解と、後の真に「批判的」な立場を示す見解とを区別することができる、という議論を展開し、それがこの註釈書全体の一つの山場にもなっている。

こうして本書では、文献学的研究が解釈の要所において重要な役割を担っているのであるが、「あとがき」において翻訳者も述べている通り、スミスのそのような方法は、『純粹理性批判』の論述の矛盾点をそれによって片付けてしまうためのものではない。本書におけるスミスの目論見は、『純粹理性批判』においてカントが対峙していた問題そのものをを抉り出すことにあり、徹底した文献学的

研究は常にこの目的の下で行われている、ということをおぼえてはならない。スマスは序文において、本書の目標は「カントの偉大な著作について可能な限り偏ることのない一つの理解に到達すること」であると明言している。そしてそのような理解に到達するには、まず、『純粹理性批判』出版に至るまでの一〇年余りの考察においてカントが答えようとしていた当の問題が何であったのか、ということが理解されねばならない。スマスの文献学的努力はすべて、カントの探求の道筋を追う、という目的に向けられることよって、本書に註釈書としての普遍的な価値を与えているのである。

二

次に本書の構成について述べておきたい。スマスは具体的な註釈に入る前に序論を立て、『純粹理性批判』の全般的な

特徴を、テキストの構成、歴史的な位置付け、主要な教説や術語法、の観点から略述している。テキストの構成については、主にアデイケスの研究成果に従って前述のように、『純粹理性批判』が「合成的性格」(composite character)のものであることを、テキスト理解の不可欠の前提として指摘している。そのなかでスマスは、相矛盾したり全く異質である議論が隣り合って並ぶというような、「建築術」(architectonic)への執着に起因する弊害を指摘しつつも、他方でその原因がカントのもう一つの重要な性格によるものであることを述べている。つまり、カントの問題意識がそもそも形而上学の問題に本来的な複合性を備えているのに加えて、カントはそれに対してあらゆる解決方法の可能性とそこに横たわる困難とを

考え、それぞれに対して偏見のない立場から検証を行おうとしている、ということである。そのためにカントは「対立する立場の間で躊躇」し、最終的な見解を

明確に示すに至っておらず、また革命的な原理もそれにふさわしい表現を得ていない。したがってスマスの努力は、カントの最も成熟した見解を見分けて、そのほかの部分と調和させる、ということに注がれることになる。

つぎにスマスは『純粹理性批判』の問題の哲学的な由来について、優れた総括を行っている。何よりも、ヒューム研究者でもあるスマスの功績は、ヒュームの因果律批判に対してカントが論駁を試みたのではなく、むしろそれに全く同意し、受け入れたのであるということ、初めて明示的に示した点にある。一般には、カントが『純粹理性批判』を執筆する段階で読むことの出来たヒュームの著作は『人間悟性の探求』(Enquiry into the Human Understanding)であり、『人間本性についての論考』(Treatise on Human Nature)については、独訳がまだ存在しなかったためにそこでの議論をカントは知らなかった、と理解されている。しか

しミスは、(個別の具体的な結果に対してその具体的な原因を主張する際の根拠)を問題にする『探求』と、(出来事が常に因果的に規定されねばならないことを要請する普遍的な因果的原理の妥当性)を問題にする『論考』とは、批判哲学に対する影響という観点からすると

重大な差違があると指摘する。そのうえでミスは、「状況証拠」に基づいての判断であると断つてのことではあるが、ジェイムズ・ビーティーによる引用と批判を通じてカントは『論考』におけるヒュームの議論に接し、その重大な意義を認めるに至ったと考えている。そしてカントは、ヒュームの真意を捉え損ねたビーティーとは違い、彼の因果律批判を否定したのではなく、原因と結果とは全く別個の異なる概念であり、したがって因果的原理は総合的性格のものである、という指摘の射程を正当に評価することができた。このことが、ア・プリアリな総合的判断の可能性への問いを定式化し、

これを緊急の課題とすることに結びつけたのである。

ヒュームによって形而上学の可能性に突きつけられた問題の切迫性は、カントのもう一人の対話者であるライプニッツの問題意識を考慮に入れることによつて、より明瞭なものとなる。そこでミスの議論の最終的な要点は、カントに対するヒュームとライプニッツの関係へと移って行く。ヒュームとライプニッツは、

思惟能力の本性についての経験論的理解に対する批判のうちに「共通の地盤」を持つ。即ち両者は、合理論が成り立たない場合の選択肢としては、経験のうちに強固な地盤を求めることではなく、実践的要求を満たすものとしての原理しか認めえない懐疑論的結論が残るだけである、という意見において一致していた。したがって存在するのは次の二つの選択肢だけである。

(1) 経験の基本的原理は総合判断であり、それはア・プリアリにも経験

によつても正当化されえない。したがつてそのような判断から成る人間の思惟はいかなる客観的・形而上学的妥当性も持たない、単なる実践的な道具にすぎない。

(2) すべての原理は分析的であり、純粹思惟によつて正当化される。したがつて思惟は「永遠に可能的なもの」のより広大な宇宙を開示するものである。

ミスによれば、ヒュームとライプニッツは認識論上のありうる立場をこのような二つの究極的な可能性の対立という形で捉えていた点において、同時代の他の哲学者たちとは一線を画している。そしてカントは両者の卓越性と問題の切迫性(「形而上学にとつて生死をかけた問い」(B19))を見抜き、この両立場の調停を最重要の課題と見なした。つまりカントの探求は、因果的原理の総合的性格というヒュームの指摘を認めた上でなお、「純粹理性の立法力へのライプニッツの信

念」がいかにして保持されるか、という問いへと向けられることになるのである。

序論では最後に、「ア・プリオリ」や「超越論的論理学」の概念、「感性・悟性・理性」という能力の三区区分など、カントに特有の教説および術語法についての概説がなされる。ここでの議論からは後に、スミスのカント理解の根幹に関わるものとして、「意識の本性」と「現象主義」の項目を特に取り上げることになった。

以上のような序論に続いて本編として、カントのテキストに沿った註釈が展開される。ところで本書のもう一つの特徴として、『純粹理性批判』全体を扱うものである、という点が挙げられるのだが、それは単にアディケス、ファイヒンガーらの文献学的成果をテキスト全体に適用した、という性格のものではなく、もともとスミスの研究方針・目的に根ざすものである。というのは、『純粹理性

批判』を、カントが答えようとしていた当の問題から理解するということは、必然的に、『批判』全体を考察の対象に入れることが求められることになるからである。確かにカントの最も成熟した見解は「超越論的分析論」、特に純粹悟性概念の超越論的演繹を中心に組み立てられる議論に見出される。しかし『純粹理性批判』の問題はそもそも、形而上学全体の問題をアンチノミーという形式において開示するという構想に最も古い起源を持つものである。さらにスミスによれば、

「分析論」の問題も実は、「超越論的弁証論」の議論が展開されるまでは十分な仕方では語られることはできないのである（後述）。このような事情からカントのテキスト全編を検討する本書は、一文ごとに解説を加えるファイヒンガーやペイトン、またはヴレーシヨヴェール (*Ladation transcendente dans l'oeuvre de Kant, 1934-37*) の註釈書のように、いわば「辞書的な使用」に向けたものとは言

えないのだが、テキストを統一するカントの問題意識と、批判的原理がふさわしい表現に近づいてゆく過程とを解きほぐすことによつてスミスは、我々を体系的な理解に導いてくれるのである。そして本書では具体的なテキストに対する註釈の部分と体系的な観点からの註釈の部分とが区別されており、後者だけを読めばスミスの体系的な理解に容易に接近できる、という便宜も図られている。

二二

ではここで、『純粹理性批判』の基本的教説についてのスミスによる概説および全体の註釈から、本書のカント理解の核心部分を抽出してみたい。

まず、この研究のなかでスミスが最初に見出すカントの革命的な成果は、意識の本性への問いを近代において初めて本当の意味で問い尋ねた、ということであ

る。デカルト以降、確かに意識について語られるようになったが、しかしそこで問題になっていたのは実は、意識はいかにして成立するかという意識そのものへの問いではなく、意識が開示する対象の性格であった。その際、意識がそのような対象を開示する「究極的で分析不可能な一つの形式」として現実存在するということは不問の前提であり、その上で、その意識に対していかなる対象がいかなる条件のもとで現前するのか、ということだけが問われてきた。それに対してカントが問題にしたのは、そのような対象についての意識はそもそも「いかにして可能であり、何のうちに存しているのか」ということであり、この問いによってカントは、それまで自明なことと見なされていた前提そのものを問いの俎上に上げたのである。

この意識の本性についての問題は、カテゴリーの超越論的演繹の鍵を握るものとして立ち現れる。カテゴリーの客観的

妥当性を問う過程でカントは、意識について、「意識の現実存在および意識が専ら現象しうる統一的形式を説明するためには、我々は何を要請せねばならないか」と定式化されるような問題を追求するに至る。これに対するカントの回答の要点は、次の点に存する。即ち、一切の意識は意味についての意識であり、したがって受動的観照ではなく能動的判断が、また単なる概念ではなく総合的解釈が、意識が現実存在する際の基本形式である。つまり判断の形におけるこの解釈の過程がなければ、意識は存在しえない。したがって一切の経験を条件付けるものとしての総合の過程は、そもそも意識が現実存在しうる以前に遂行され、意識そのものをも条件付けるものでなければならぬのである。

さて、このような意識の本性への洞察がもつ革命的性格は、より広い問題地平の中に置かれることによって、その意義が十全に理解される。我々はここで、翻

訳者もスミスの「体系的議論の主軸」として指摘する、〈主観主義 (subjectivism) から現象主義 (phenomenalism) への移行〉という主張へと導かれる。その主張は、次のようにまとめることができらるう。即ち、『純粹理性批判』における自我、認識対象、理性の本性についてのカントの理解には、主観主義的見解と現象主義見解とが混在し、カントは全編を通じて両者のあいだでの葛藤しつつも、執筆時期の遅い部分では、より成熟した見解としての後者に近づいている、というものである。

主観主義的見解とは、意識として既にそれ自体において現実存在する主観的なものと、それとは全く独立に現実存在する客観的なものとの区別を主張する立場である。この立場に従えば、主観的・心的状態、あるいは《觀念》だけが、意識が直接的・間接的に持つことのできる唯一の対象であり、それ以上のこと、例えば外的対象の現実存在は、付加的な推理

過程の結果として導き出されるものである。この場合には、個体的自我の現実存在は公理的で自明のものと思われ、その結果、対象の客観性の根拠はカテゴリーに従った統覚の総合的統一ではなく、物自体による触発にしか求められなくなる。しかしそれでは、単なる主観的表象も客観性を主張されるべき対象も共に、その既に独立自存する主観の心の変容としてしかみなされえず、その意味においてそれらの表象の間の区別は成り立たなくなるだろう。スミスによれば、このような主観主義の見解は第一版の超越論的演繹における「超越論的对象」の理論のうち現れており、それは表象とその原因としての物自体（＝超越論的对象）という区別ないし関係を主張する、「半・批判的」(semi-critical) または「非・批判的」(un-critical) な理論である（超越論的对象を表象の原因として物自体と同一視するというスミスの解釈については、ペイトン以来多くの反論があることは既に広く知

られているので、ここではその点については特に取り上げない）。

他方でカントは前述のように、意識の本性への問いを立てることによって、この主観主義の立場が拠って立つ前提そのものを問いに付してもいる。その場合のカントの結論は、あらゆる経験の条件としての総合の過程は経験の対象を可能にすると同時に、自我意識をも可能するものであり、したがって一切の意識に先立たねばならない、というものである。それゆえにそのような総合の心的過程そのものについての意識はあり得ず、たとえ心的状態についての意識であっても、およそ意識である限りは、外的対象についての意識と同じ仕方では知知されるのでなければならぬ。つまりそれらは意識の対象である限り等しく客観的な仕方では知されるのであり、主観的なものが自然の体系から全く独立した現実存在としてそれに平行していたり、あるいはその自然体系についての意識を構成したりする

というのではなく、主観的・心的状態はそれ自体、意識に対して開示される自然秩序の一部である。その結果、（主観的なもの―客観的なもの）という対立は意味を持たなくなり、心的状態をも含めた自然秩序としての現象と、その秩序を条件付けている基底領域としての「ヌーメナの現実存在」(nominal existence) との対立、つまり（現象―実在）という対立に取って代わられる。スミスはこのような対立を基盤にする立場を現象主義と名づけ、『純粹理性批判』における「真に批判的」(genuinely critical) な見解であると考える。そしてその革命的な意義は、認識の問題を、（いかにして主観的意識から外的対象へと出て行くか）という問いから、（自我を含めた一切の意識を可能にするヌーメナの条件は何か）という問いへと変貌させたという点に認められるのである。

以上のような仕方では問の枠組みそのものを変えた、という点に、スミスはカ

というのではなく、主観的・心的状態はそれ自体、意識に対して開示される自然秩序の一部である。その結果、（主観的なもの―客観的なもの）という対立は意味を持たなくなり、心的状態をも含めた自然秩序としての現象と、その秩序を条件付けている基底領域としての「ヌーメナの現実存在」(nominal existence) との対立、つまり（現象―実在）という対立に取って代わられる。スミスはこのような対立を基盤にする立場を現象主義と名づけ、『純粹理性批判』における「真に批判的」(genuinely critical) な見解であると考える。そしてその革命的な意義は、認識の問題を、（いかにして主観的意識から外的対象へと出て行くか）という問いから、（自我を含めた一切の意識を可能にするヌーメナの条件は何か）という問いへと変貌させたという点に認められるのである。

ントの決定的な意義を見出しており、このカント理解は、文献学的知識、哲学史的展望、思想内容への洞察を合わせた総合的な視点からの研究の賜物であると断言できる。しかしそのような功績が認められる一方で、「真に批判的」な見解と、「半・批判的」な見解とが同居していると認めてしまうこと、したがって結局は、後者は（本来ならば）『純粹理性批判』のうちにはあつてはならない見解であるとなし、果して『批判』におけるカントの思想・方法を本当に汲み尽くしたうえで結論であると言えるのだろうか。この点については、スミスの註釈書の功罪として、第五節において改めて考えたい。

四

さて、ハイムゼートの指摘する通り（Ⅲ）、本書が「超越論的弁証論」の註

釈に割く紙幅は、「分析論」のそれに比べれば確かに少ない。しかしそのような見かけの扱いの差とは裏腹に、スミスはカントの認識論の本質的構成要素として、「分析論」に劣らない積極的な意義を「弁証論」に認めているのであり、この点もまた、本書の重要な特徴として指摘しておくなければならない。『純粹理性批判』におけるカントの成熟した見解としての現象主義は、主に、「分析論」のうちでも第二版での書き換えを含めた執筆時期の遅い部分において定式化される。しかし実はこの見解は、理性とその概念（理念）の本性についての理説と不可分のものである。したがって（主観主義から現象主義への移行）というスミスのカント理解は、「弁証論」の議論を踏まえることによって初めて可能となるのである。

我々の経験的世界についての現象主義的見解が採られたとき、この世界を限界付けるものとして理解されるのは、もは

や表象の原因としての物自体の概念ではなく、条件付けられたものをそのようなものとして我々に開示するところの、無条件者の概念である。限定性の意識は、その限定を超えるものについての意識を前提として初めて可能になる。したがって空間・時間における経験的世界の限定された（条件付けられた）相対的な性格が我々に開示されるには、我々の感性と悟性の形式のほかに、無条件者という独特の概念が必要とされるのである。

以上のことから理性能力は、現象主義の立場に立つことによって初めて、根源的に悟性から区別される必要が認められることになる。スミスによればこの点についても、『純粹理性批判』には未成熟な見解と批判的な立場にふさわしい見解とが混在している。より原初的な構想では、理念は単に、悟性概念が経験的認識において服すべき限定条件を除去されることによって形成されたものとしての無条件者の概念である。それは現実の経

験を絶えず拡張するように鼓舞する図式としての理念ではあるが、経験に基づき、経験から導出されるものである。そしてこの場合、理性とは、のように理念的な満足を主張するものとしての悟性に過ぎない。それに対して限界概念としての理念は、偶然的に与えられたものについての我々の意識に先行し、それを可能にするものでなければならぬ。したがってそのような概念としての無条件者の理念は、他のいかなる概念からも導出されえず、悟性とは根源的に区別された能力としての理性のア・プリオリな所産でなければならぬ。そしてこのような理念は、限定されたものとしての経験のフェノメナの性格、現象としての認識対象を開示するものとして、経験の可能性の条件のうちに数え入れられる。

このように現象主義とは、「分析論」において提示される客観的世界と「弁証論」において独特の能力として確立される理性という、相互依存的な二つの要素

を含むものとして初めて、完全な形で理解される立場である。理性が悟性とは無関係に独自に形成する無条件者の理念は、我々の認識が常に限定されたものに過ぎないことを開示し、そうして我々の認識を条件付けている。したがって経験されるもの自身が、経験されうるもの以上の何か、つまり形而上学的なものの中に含んでいるのであり、「超越的なもの」とは、この内在的要因としての形而上学的なものが、独立した扱いの可能な実在物として誤ってみなされる場合に生じるのである。

以上のような理解からスマイスは、「分析論」までの成果に従って「超越的なもの」を拒絶するのが「弁証論」の課題ではなく、「弁証論」の議論を待って初めて「分析論」は、真理と実在についての議論としての完全性を得る、と考える。この理解については、同じ「継ぎはぎ細工説」に依拠していながらアディケスとは異なる結論である、ということが

注目されるべきだろう。アディケスの文献学的研究は、旧来の形而上学に対する批判的・否定的な仕事を遂行する部門として想定された「純粹理性の規律」(Dießeln der reinen Vernunft)に「超越論的弁証論」の起源があり(72-74)、またそれゆえに、アリストテレスの論理学において否定的な議論を対象として含む部門であった「弁証論」の名称がよく当てはまった(77-78)という点を重視し、その否定的な意義だけを理解している。そしてカントがそのように「分析論」「弁証論」という論理的図式を採用することによって抱いた体系的構想は、それぞれの問題にふさわしい体系を見出してゆくことのうちに存するのではなく、既成の図式にカント自身と彼の問題とを適合させてしまうものであった、と批判する(76)。こうしてアディケスにとってはカントの持つ体系的構想やその形式は、カントの思想の核心を再発見するうえで、粉砕されるべき単なる外面的な殻に

過ぎない(VI-VII)。これに対してスミスもまた、「建築術」への執着がもたらす弊害を指摘するのではあるが(特に「純粹悟性概念の図式論」に関する批判は手厳しい)、しかし「分析論」と「弁証論」という枠組みについては、後者に固有の根本的な意義が洞察される限りにおいて、全く無意味なものであるとは見なされない。つまり、真理の理論が完成されるには理性が固有の能力として確立されねばならず、これを中心的使命とする「弁証論」は、「分析論」とは原理的に区別され且つ不可欠であるような理論を展開するのである。「弁証論」を含めたこのような体系的理解を得た点に、スミスの強い特色があると言えるだろう。

五

スミスはアデイケスと同様に、カントの思索を忠実に再現するという意図に基

づく文献学的研究を出発点としていながら、現象主義という理解のもとに「分析論」と「弁証論」とのより有機的な連関を捉えることにおいて、アデイケスとは異なる結論へと導かれた。しかし「継ぎはぎ細工説」を抛り所としている限りで、スミスにもその弊害は見られる。

『純粹理性批判』は異なる時期に書かれた諸原稿を寄せ集めてできたものであり、それらの原稿は相互の不整合が解消されないまま配列されているという理解は、「真に批判的」な立場としての現象主義の見解と、「半・批判的」な立場としての主観主義の見解とを見分ける、というスミスのカント解釈の根拠となっている。そしてこのような読み方は結局、カントのより成熟した立場を表すと見られる見解に対して、他の部分を可能な限り調和させ、それができない部分は無用の議論として切り捨てざるをえない、という性格のものである。この読み方が前提にしているのは、「空間・時間」「現象」

「物自体」といった主要な概念について、その(本来的・批判的)な意味が見出されたならば、それでもって全体を読み切ることができるという了解であり、その結果、スミスは「ほとんどすべての章において」矛盾に出会うことになる。しかしスミスには、この矛盾こそ、カントが第二版の序文において述べていた「見かけの矛盾」(B XLIV)であるかもしれない、という配慮が欠けていたのではないだろうか。つまり我々が考えねばならないのは、カントが方法に従って自覚のもとに、カントの言葉で言えば「全体の理念」(Idee)の観点から、段階的に概念の内実を展開し、議論を進めているという可能性である。実際カント自身が、この「全体の理念」が把握されるまでは部分同士の「見かけの矛盾」は避けられない、と明言しているのである。

ペイトンの指摘する通り、「継ぎはぎ細工説」に完全に依拠してしまうならば、解釈の過程で矛盾を見出したときに、そ

の解釈の妥当性を考え直すことなく、「継ぎはぎ細工説」をさらに確証するだけで終わってしまいかねない(42-43)。この意味で、(主観主義から現象主義への移行)というスマイスのカント解釈は、『純粹理性批判』がカントによって(一つの全体)として提示された結論であるという点への配慮を不用意に省いたまま、「真に批判的」であるとされる教説を見出すことで探求を終わらせてしまうものである。さらにこのことは、カントが追求した「建築術」に従った議論の展開ということを、スマイスやアディケスがあっさりと退けてしまうことと無関係ではない。しかしベックの述べる通り、著者によって最重要と思われること(「建築術」や「全体の理念」)が読者によって無視されてもよいものであると考えるならば、それは誤りであろう(三)。

スマイスの文献学的研究は、『純粹理性批判』における様々な議論の背景を示すことでカントの問題の複合性を明らかに

し、これを断片的に利用することの無意味性を主張することに貢献した。それだけに、スマイスがカントの問題意識の原初的狀態にまでさかのぼるという意図を持つていながら、『純粹理性批判』における議論を整合的に理解するための視点はいかにして得られるか、という問題を見過ごしていたことはいっそう惜しまれる。しかしまたその一方で、このようなスマイスの読解に対する反省(反発)が、ペイトンやハイムゼート、ベックなどの研究に重要なきっかけと示唆を与えたということも、指摘しておかねばならないだろう。

あらゆる方面からのカント研究が進み、問題が高度に細分化されてきた現在の学界において、全体への見直しを与える意図のもとで行われるランニング・コメントリーというスタイルは、ペイトン、ハイムゼート以降すっかり衰退してしまつた。それは、カント哲学の諸問題が個別に明らかにされる一方で、カントや哲

学そのものの「現代的意義」を性急に求めるあまり、その中から使える部分だけを取り出す、という傾向が顕著になつたことと無縁ではないだろう。しかしスマイスの研究が示したのは、カントの複合的な問題がもつ気の遠くなるような複雑な連関と奥行きであり、この点において本書は、断片的な扱いによつてはカントを理解することにはならないという反省を、現代の我々に促すものである。本書がここに翻訳されたことの最大の意義も、まさにこの点に存するだろう。

さて、このような観点から見ると、今後に翻訳が期待される古典的な研究書はほかにも挙げられるだろう。例えば、Gerhard Krüger, *Philosophie und Moral in der Kantischen Kritik* (1931) や、またやや特殊ではあるがハイデガーにも影響を与えたと思われる Albert Johannes Dietrich, *Kant's Begriff des Ganzen in seiner Raum-Zeitlehre und das Verhältnis zu Leibniz* (1916) など、カント哲学の全

体的連関や問題の奥深い背景を教えてくれるという意味において、現代においてもまったくその価値を失っていない。また同様の観点から、E. Boutroux, *La philosophie de Kant* (1926) や Heman-J. de Vleeschauwer, *L' évolution de la pensée kantienne* (1939) など、日本ではあまり顧られていないフランスの古典的研究書の翻訳も期待したい。

最後に本書の翻訳についてであるが、その訳文は、本書が全体を通じて示そうとする体系的理解を一気に捉えるような通読に十分に耐えうる、大変スムーズなものであり、スキズの明晰な英文を正確に伝えることに成功していると言えるだろう。本書がこの翻訳を機に、単に古来のゆえに無視されることなく、我が国の多くの研究者によってその真価が共有されるようになることを切望する。そうであってこそ、この大部の書を見事に訳し切った翻訳者の労苦も報われるだろう。更に、我々に与えられたこのような機会

の背景には、厳しい不況に見舞われる出版業界のなかで、本書のような絶然たる、しかし質の高い学術書の翻訳・刊行に踏み切った出版社の見識と熟意があることも、銘記しておきたい。

Paton, Herbert James. *Kant's Metaphysic of Experience*, vol. 1. London: George Allen and Unwin Ltd., 1970.

引用文献

- Adickes, Erich. *Kants Systematik als systembildender Factor*. Berlin: Mayer und Müller, 1887.
- Beck, Lewis White. *A Commentary on Kant's "Critique of Practical Reason."* Chicago: The University of Chicago Press, 1963.
- Heimsoeth, Heinz. *Transzendente Dialektik: Ein Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft, Erster Teil*. Berlin: Walter de Gruyter & Co., 1966.
- Maller, Rudolf. "Main Currents in the German Interpretation of the Critique of Pure Reason since the Beginnings of Neo-Kantianism," in *Journal of the History of Ideas* 42 (1981) : 531-551.